

1955年郭沫若の九大訪問とその軌跡

岸田, 憲也
九州大学大学院人文科学府博士後期課程 : 中国文学

<https://hdl.handle.net/2324/13533>

出版情報 : 貴重文物講習会. 18, 2009-03-13. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

1955年郭沫若の九大訪問とその軌跡

人文科学府博士後期課程(中国文学専攻) 岸田 憲也

1. 郭沫若について

[資料1] 郭沫若の略歴

1892. 11. 16-1978. 06. 12 中国現代文学の開拓者の1人。他に歴史研究、政治活動等でも幅広く活躍した知識人。四川省樂山市出身。本名は郭開貞(鼎堂など多くのペンネームがある)。

地主の家庭に生まれ、幼い頃から家塾で伝統教育を受ける。1913年末、北京から日本へ留学(朝鮮経由)。一高予科から六高、九州帝国大学医科分科大学に進学。この間、日本人女性佐藤をとみ(のちの郭安娜)と同棲。3男2女に恵まれたが、生活は困窮する。九州帝国大学医科分科大学在学中から、文学に急速に傾倒し、タゴールやホイットマン、ゲーテなどの影響の下、新詩の創作に取り組み、ロマンティズム溢れる詩を次々に書き上げる。また同じく日本留学中であった張資平や郁達夫、成仿吾らと文学結社創造社を結成。卒業後、帰国して国民革命に参加。1927年、「請看今日之蒋介石」(今日の蒋介石を見よ)を書いたことで、蒋介石からの逮捕令が出る。1928年から千葉県市川市で亡命生活を送り、この間中国古代史や古文字の研究に没頭。日中戦争勃発後、単身密かに帰国。中華人民共和国成立後は、国務院副総理、中国共産党中央委員、全人代常務委員会副委員長、全国政協副主席、中日友好協会名誉会長等を務める。1955年は訪日科学代表団の団長として18年ぶりに訪日。文革中は自己批判(1966年4月)を行なったが、迫害は免れなかった。

* 『沫若文集』全17巻(人民文学出版社、1957-1963年) →文学部 中文/42B/746

『郭沫若全集』文学篇全20巻(人民文学出版社、1982-1992年) →六本松分館(一部、文学部にあり)

※全集は他に歴史篇(全8巻)、考古篇(全10巻)

小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝』全6巻(平凡社、1967-1973年) →中央図書館等

郭沫若著、小峰玉親訳『日本亡命記』(法政大学出版局、1974年) →法学部 Aj10/K/8

殷塵著、さねとうけいしゅう訳『郭沫若日本脱出記』(第一書房、1979年)

龔継民・方仁念『郭沫若年譜』全3巻(天津人民出版社、1992年) →六本松分館

武継平著『異文化のなかの郭沫若-日本留学の時代-』(九州大学出版会、2002年) →中央図書館等

近藤春雄著『中国学芸大事典』(大修館書店、1978年) →中央図書館等

天児慧ら編『岩波 現代中国事典』(岩波書店、1999年) →中央図書館等

※九州大学附属図書館の郭沫若関係蔵書数…211冊(OPACで「郭沫若」で検索)

[資料2] 九州帝国大学医科分科大学時代と新詩

松林呀！你怎麼這樣清新！

我同你住了半年，

從也不會看見，

這沙路兒這樣平平！

松林よ！どうしてこんなにすがすがしいのか！

私は君と半年間過ごしてきたが、

こんなのは一度も見たことがない、

この砂の道がこんなに平坦なのを！

兩乘拉貨的馬車從我面前經過，

倦了的兩個車夫有個唱歌。

他們那空車里戴的是些什麼？

海潮兒応声着：平和！平和！

二台の荷馬車が通りすぎ、

草臥れた二人の車夫が歌を歌っている。

空の荷馬車に載せているのは何だろうか？

潮騒の「平和！平和」という声が響いている。

「晚歩」(『女神』)

※新詩…現代詩ともいう。1917年の文学革命以後、新文学のジャンルのひとつとして生まれたもので、西欧の詩の影響を受け、伝統的な形式への批判から出発した自由詩⇔旧詩(古典詩)

2. 郭沫若一行（訪日科学代表团）訪日の概要

[資料3] 郭沫若と日本の関係

- ① 留学期＝1914年～1924年（東京、岡山、福岡 一時帰国も含む。うち九州帝国大学医科分科大学在学は1918年9月～1923年3月）
- ② 亡命期＝1928年～1937年（市川）
- ③ 訪日期＝1955年12月1日～12月25日（東京、千葉、箱根、京都、大阪、奈良、岡山、広島、下関、福岡、別府）

[資料4] 「訪日科学代表团」のメンバー

- ・ 団長…郭沫若
- ・ 団員…馮乃超（教育学、東京帝国大学卒）、翦伯贊（歴史学）、蘇步青（数学、東北帝国大学大学院卒）、茅以昇（橋梁工学）、汪胡楨（水利工学）、馮德培（生理学）、薛愚（薬学）、熊復（歴史学）、葛庭燧（金属物理学）、尹達（考古学）
- ・ 随員…李徳純 ・ 通訳…劉徳有、楊貴林 ・ 秘書…戚慕光

[資料5] 訪日の主な日程（別紙参照）

[資料6] 「殺人的」な日程

代表団の日本滞在はわずかに二十五日間であったが、東京を皮切りに、千葉、市川、名古屋、京都、大阪、岡山、広島、福岡、下関、八幡、別府などを訪問し、精力的に各界の人々と接触し、学術・文化交流を行った。一言で言えば、それは充実した、有意義な二十五日間だった。

訪日中、日本の友人は郭氏によく「お疲れになったでしょう」と訊いた。郭氏は、いつも「いいえ、疲れていません」と答えたあと、「代表団の日程は殺人的だよ」と言って笑った。日本語の「殺人的」というのは、中国語と違って「人を殺す」という意味はないが、代表団の日程はたしかにハードであった。朝から晩までギッシリと日程が詰まっていた。「殺人的な日程」は、中国語ではさしづめ「日程緊得要死」とでもなるうか。

しかし、この「殺人的な日程」については、日本側を責めるわけにはいかない。郭氏と会いたい人、また郭氏を案内したいところが多かったので、これらの要望を満たすためにこのような「殺人的」な日程となったものであり、郭氏と代表団に対する好意にほかならなかったのだ。

劉徳有著『わが人生の日本語』（日本僑報社、2007年）p. 203-204→六本松分館

[資料7] 郭沫若訪日に関する基礎資料

- ・『路、在開拓』（一行の訪日を収録した映像資料）→北京・郭沫若記念館所蔵 詳細不明
- ・「昭和三十年十月 郭沫若氏の来学に関する書類」（九州大学大学文書館所蔵）
- ・「郭沫若中国科学院長 一行来訪記念写真」（九州大学大学文書館所蔵）
- ・『九大醫報』第25巻第3号「郭沫若先生特集号」（九州大学医学部躬行会出版部、1955年12月）→医学分館
- ・「訪日之行」（『人民日報』1956年1月13日）→文学部 中文/50B/42
- ※『人民日報』は一行の訪日を逐一、報道している。日本の新聞（『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』）も同様だが、報道に斑がある。→政治的側面を意識してか？当時の報道の限界か？
- ・「訪日雑詠」（『北京日報』1956年2月29日、のちに『沫若文集』『郭沫若全集』にも収録）
- ・劉徳有著、顧娟敏編注『随郭沫若戦後訪日一回憶与紀実』（遼寧人民出版社、1988年）村山孚訳『郭沫若・日本の旅』（サイマル出版会、1992年）に邦訳あり→六本松分館

3. 郭沫若一行（訪日科学代表团）の九州大学訪問

[資料8] 郭沫若九州大学招請に関する一連の動き

しかし、考えてみると私の母校九大医学部からは、医者は医者だが、中国での大物も大物、とびきりの大物を出している。中華人民共和国前副総理、中国科学院院長郭沫若先生がすなはちその人である。この人を招待して、九大で講演をしてもらったら、日中親善にとってこんな意義のあることはない。またその機会に日中医学提携の地固めもできようというものである。これはぜひ実現する必要があると考えたので、一月二十五日下関の小野寺直助先生をお訪ねして先生の御意見を伺ってみた。先生は九大在職中から中国留学生をたいへん可愛がっておられたので、私の話に大賛成で、郭先生の招待運動をおこすならその発起人になつてもよいといわれた。また戸畑の赤岩八郎先生もこの企てにひじょうに乗気で自ら発起人を買って下さった。これに力を得て私は九大医学部の先生方を一人一人訪問してその御意向をただしたところ、みんな賛成して下さった。そこでこの運動をさらにおしひろげ、九大医学部の関係者だけでなく九大の卒業生全体の力でぜひともこの目的を達成したいと思つた。これが実現し、九大が出した偉大な世界人郭沫若先生を母校に迎えることができるならば、それは日中親善はおろか世界平和のためにどんなに大きな意義があるであろうか！…（中略）…私がこんな大それた事業ととり組み、狂人かと思はれるほど熱心になつたことにいま一つのわけがある。それは郭沫若先生と多年に亘つて無二の親交のある日本中国友好協会副会長内山完造先生が私を激励し指導して下さったことである。

柏木正一「郭沫若先生を招く」（『九大醫報』第25巻第3号）

[資料9] 郭沫若から柏木正一への返信（1955年5月10日）

3月19日、火野葦平氏に託されたお手紙をインドにて頂戴いたしました。母校九州大学が私を日本に招待しようとして動いてくださり、大変光栄に思います。しかし、仕事とその他のことあり、今秋は無理なようであります。まずはお返事まで。

（原文）

三月十九日托火野葦平氏転来大札已在印度接読。母校九大邀我赴日，甚感光荣。但以業務及其他關係，今秋恐難如願。特此奉復。

黄淳浩編『郭沫若書信集（下）』（社会科学出版社、1992年）p.218→六本松分館

[資料10] 郭沫若から九州大学新聞への返信（1955年5月10日）

私は母校を離れてもう三十二年の時が過ぎましたが、いつも当時の自由な学風を懐かしく思っております。三十二年は決して短い時間ではなく、世界情勢も大きく変化をいたしました。しかし、千代の松原と博多湾の風景は依然として目の前にあるようです。母校の先生や学生の皆様が私の訪日運動を展開されておられるようで、大変感激しております。私はもう一度福岡を訪れ、皆様にお会いしたいと願っていますが、各種事情により今秋はおそらく無理なようであります。

中国と日本はもともと兄弟のような関係にあります。しかし、不幸なことに我々の間には人為的な障害が立ちはだかっています。これは決して私たちの側に竹のカーテンがあるわけではなく、第三国が私たちの間に鉄のカーテンをかけているのです。我々の相互の往来が順調にいくように、我々が力をあわせてこの鉄のカーテンを除去する行動に出ようではありませんか。祖国を愛する日本国民、学生、知識人の皆様はここ数年来、鉄のカーテンを除去して、民族の独立、民主主義、自由を勝ち取るために努力をしておりますね。私は皆様方のご努力に心から敬意を表します。私たち中国の経験から申しますと、必ずやこの目的は達成されると思っております。

(原文)

我離開母校雖已經三十二年，但我經常懷念當時的自由學術的風氣。三十二年決不是短暫的歲月，世界的形勢經歷了巨大的變遷，但千代松原和博多灣的風光依然如在眼前。母校的老師和同學們已經展開邀請我訪日的運動，我很感激。我衷心希望再一次訪問福岡，與各位親切接觸，但考慮到種種形勢，今秋恐難以如願。

中国和日本本来是象兄弟一樣的国家。但不幸，在我們之間存在著人為的障礙。這決不是說在我們方面有竹幕，而是第三国在我們中間挂起了鐵幕。為了我們互相往來的順利，很明顯，我們要共同努力，一起揭開這個鐵幕。我知道，愛国的日本人民、日本学生和日本的知識分子最近幾年來朝著這一方面，即為除掉鐵幕，爭取民族獨立、民主、自由而努力。我對你們的努力表示衷心的敬意。通過我們自己的經歷，我相信你們一定能夠達到這一目的。

黃淳浩編『郭沫若書信集（下）』p. 219

[資料 11] 九州大学郭沫若氏歡迎実行委員会からの招請状（1955年10月7日）

五月十日付九州大学新聞宛のお手紙は大きい共感と反響を呼びおこし、先生を母校へお招きする運動を急激に発展させました。ひとり九州大学のみでなく全国的に先生を日本へお招きしようと云う声が高まってまいりました。

お手紙では御多忙で今秋は意の如くならないだろうとありましたが、残念に存じておりましたが、先般貴国の学者を日本へお招きすることになり、既に九月中旬正式に招請状が出された由九州大学へも連絡がありました。

私ども九州大学関係者は全力をあげて日本学術会議に協力して、この機会にぜひ先生を母校にお迎えすることに決定いたしました。御多忙中甚だ恐縮ですが、ぜひ今秋には、日本へ、そして福岡へ御来駕下さいますようお願い申し上げます。…（中略）…

九州大学は先生の母校であることを誇りとしています。その先生を九州大学に迎えることができますならば、これが機縁となつて、こんご日中友好のために働く人材が、わが学園からぞくぞく輩出する^マことは明らかであります。

「昭和三十年十月 郭沫若氏の来学に関する書類」

※九州大学郭沫若氏歡迎実行委員会（計39名）

- ・委員長…山田穰（九州大学総長）
- ・副委員長…操坦道（九州大学医学部長、第一内科教授）
- ・委員…各学部の学部長・教員、学生部長、事務局長、庶務課長、卒業生、学生

[資料 12] 九州大学での講演（1955年12月17日）

- ① 博多は両国交流の拠点
- ② 医学の中から人民愛を学ぶ
- ③ 建設に日本の進歩的要素を吸収

私は大正七年福岡に来て、九州帝国大学医学部に入ることを決めた。何故私が東大や京大などを選ばずに九州大学を選んだか、そのわけをお話する。

なぜなら私は福岡が好きだったからです。私は若い時から、歴史の教科書で博多湾を知っていました。ずっと以前お国の奈良平安時代、多くの留学生が中国に派遣されて来ました。それが出帆した港は、歴史の教科書によると、博多からであった。

だから博多は以前から中日文化、経済交流の重要な地点であった（拍手）。現在名高い博多織は教科書によると、日本の弥左衛門（？）という人が広東などで学び、その技術を日本に持って来たので、今日でも、博多織は有名である。

私は、さきほど菊池教授と話したが兪良輔が博多に版木を持って来たが博多版木も今はないとの話である。このように博多は非常に早くから中日交流に深い関係があった。そのために私はこの福岡を選び、九州大学医学部を選んだのです。(拍手)

私は福岡に来て、帝大に入ってから諸先生、特に小野寺先生には非常に親切にしてくださいまして、私の選択が間違っていなかったと思った。私はこの九大で、五年以上学生々活を送りました。私はここにおられる諸先生に白状しますが、学生として、同窓生として、真面目な学生ではなかった。(笑い)福岡の大自然は、美しい。毎日目にしている博多湾はなんと美しいでしょう。いまと違って、以前の千代の松原は美しい所でした。このように私は、毎日美しい大自然と接触し、諸先生から親切にされてあまり勉強しなかった。(笑い)私は医学の勉強を怠ったばかりではなく、別の道を歩んだのです。…(中略)…

このように、われわれのなすべき事は沢山あり、働き手の幹部と科学的知識が必要である。目下中国では大量の働き手・幹部の養成を計画している。私たちは全世界の各国人民から進歩的なものを学びとりたい。全中国人民は新しい基礎のうえに立って中日の文化交流を一そう発展させたいと心から願っている。(拍手)ここにいる同窓諸先生はいささか憤慨に感じられていると思う。それは兄弟のような中日の国交が回復していないことである。

しかしこの状態でも両国の学術その他の交流を押し進め発展させよう。例えば暇があつたら先生方はどんどん中国を訪問して、建設的批判をあおぎたい。短期間(一〜三ヶ月)の講義も可能であろう。このような方法は歓迎する。お国の政府も、これにそんな妨害を加えないでしょう(爆笑)。それに学術面の研究資料成果の交換もたやすくできるだろう。両国が代表を送って翻訳についてもお互いに推進できよう。こうした仕事は国家の現況でも可能であろう。留学生、学者、記者の相互交換派遣は目下困難であり、一日も早く中日の国交回復を待っている。

語りたことは千言万語ありながら、時間の制限が残念です。機会があれば、中国を是非訪ねてください。喜んで教えを乞う。若い同窓に希望するのは、立派な師の指導のもと、専門の勉強の他に祖国・真理・平和・人民を愛する人に成長する勉強もして欲しい。(激しい拍手。聴衆の中央学生席へ手をのぼしての熱弁)若い皆さんが中日国交回復に力をつくされることを希望する。

最後に皆さんの絶えざる進歩と発展をお祈りしたい。

『九州大学新聞』(1955年12月25日)→中央図書館

※講演は中国語で行われた(劉徳有氏による通訳あり)→原文は劉徳有著、顧娟敏編注『随郭沫若戦後訪日一回憶与紀実』にあり

[資料 13] 「郭沫若先生の肉声を聴いた」

一九五五年といえわが国はまだ国連加盟ならず、お隣の中国とは人的も物的にも交流は少なく、社会主義の新生中国とはどんな国か、対日観はどうか、中国を代表する学者、政治家の先輩の講演は、若者たちの関心を呼び、交通延滞による数時間の遅れにも拘わらず、満員の会場は熱気に溢れていた。

堤清行「郭沫若先生の肉声を聴いた」(『郭沫若研究会報』第10号、2008年)

4. 九州大学所蔵の郭沫若関係の貴重文物

[資料 14] 郭沫若（訪日科学代表团）から寄贈品

- ・「福地万間広」（額、九州大学附属図書館医学分館所蔵）
- ・「図書館」（額、九州大学附属図書館医学分館所蔵）
- ・「实事求是」（額、九州大学総長室）
- ・図書（全 10 冊、九州大学附属図書館中央図書館所蔵）
→蘇歩青著『射影曲線概論』（中国科学院、1954 年）、毛晋編『六十種曲』、玄奘・弁機撰『大唐西域記』、酈道元撰『水経注』、『大唐三蔵取経詩話』、董説撰『西遊補』、陳寅恪著『元白詩箋証稿』、白居易撰『白氏長慶集』（以上、文学古籍刊行社、1955 年）、楊樹達著『漢書窺管』、楊樹達著『論語疏証』（以上、科学出版社、1955 年）→いずれも中央図書館

[資料 15] 「福地万間広」とその解釈

福地萬間廣 精神有食糧 福地は 万間に広く、精神に 食糧有り。
海天同永壽 日月與争光 海天と 同に永く寿しく、日月と 与に光を争はん。
(解釈)

まるで仙界のような福岡の地、そしてこの図書館は広々としており、汗牛充棟の書は心の糧となって、我が留学生生活を支えてくれた。海や空がいつまでもこの世に存在し、太陽や月が輝き続けるように、日中両国が未来永劫に平和であることを願ってやまない。

5. 訪日時の郭沫若が書き残した福岡（九州大学）に関連する詩文

[資料 16] 「訪日雑詠」と福岡

「訪日雑詠」…「箱根即景」「訪須和田故居」「別須和田」「宮島即景二首」「弔千代松原」「帰途在東海道車中」「宿春帆楼」「游別府」「船入長江口」（全て旧詩、『沫若文集』『郭沫若全集』等に収録）

①「弔千代松原」

千代松原不見松	千代の松原に 松を見ず、
漫言巨害自微蟲	漫りに言ふ 巨害は 微虫に自ると。
八年烽燧生靈苦	八年の烽燧 生靈苦しみ、
兩彈鈾鉀井竈空	兩彈の 鈾・プルトニウム 鉀 井竈空し。
銅佛涅槃僧寺渺	銅仏の涅槃 僧寺は 渺たり、
銀沙寂寞夕陽紅	銀沙は寂寞として 夕陽は紅し。
劇憐迷霧猶深鎖	劇しく憐れむ 迷霧 猶ほ深く鎖し、
約翰居然來自東	約翰 居然として 東より来る。

(解釈)

学生時代、毎日目にしていた千代の松原の松が姿を消してしまった。この大きな被害は、小さなマツクイムシによるものだという。8年も続いた日中戦争により、我々中国人民は苦しめられた。アメリカにより投下された原爆は、井戸や竈など生活に必要なすべてのものまで破壊してしまった。懐かしき称名寺の大仏、そして寺までもなくなってしまったと言うではないか。箱崎海岸の砂浜は埋め立てが進み、昔の面影はすっかりなくなって、寂しささえ漂う。しかし、太陽だけはいつも赤々と照り続けている。今、一番悲しいことはまるであの原爆を彷彿とさせるキノコ雲のように日中関係がすっきりしないことであり、更に日本政府が在日米軍のロケット弾—オネスト・ジョンの国内配備を容認したという。何ということだろうか。

※拙稿「九州帝国大学留学生の郭沫若が見た「千代の松原」(『中国文学論集』第 37 号、2008 年 12 月)

②「帰途在東海道車中」

戦後頻傳友好歌	戦後 頻りに伝ふ 友好の歌、
北京聲浪倒銀河	北京の声浪は 銀河を倒す。
海山雲霧崇朝集	海山の雲霧は 崇朝に集ひ、
市井霓虹入夜多	市井の霓虹は 夜に入りて多し。
懷舊幸堅交似石	旧を懷へば 堅交の石に似たるを幸いとし、
逢人但見笑生窩	人に逢へば 但だ見る 笑ひて窩を生ずるを。
此來收穫將何有	此來 收穫は 將た何か有らん、
永不願操同室戈	永に同室の戈を操るを願はず。

(解釈)

戦後、至るところで「日中友好歌」が広まり歌われるようになり、北京のうたごえは日中友好の気運が高まってきた証拠である。朝になると海に雲、山に霧が姿を現すように、街中に見られるネオンは夜になると赤々とまぶしく、目障りなほどである。ひと昔前の人々の交わりは石のように堅く、人に会えば笑顔が見られるほどであった。今回の訪日で収穫できたものは何だったのだろうか？それは日中が二度と戦火を交えることなく、友好的なムードを築いていくことである。

※拙稿「郭沫若の訪日と福岡・九州大学」(『九州中国学会報』第47巻、2009年5月予定)

[資料 17] 「帰途在東海道車中」と詩碑

さて、この二つの訪中団(日中文化交流協会訪中団と日中友好協会(正統)訪中団を指す。訪中は1973年10月一岸田注)に加わっていた福岡県出身者が帰国した直後、中国医学者代表団が来福し、県内医療関係者をはじめとする各界の盛大な歓迎会が催されましたが、この席に、郭沫若先生とゆかりの深い数多くの九大関係者が参加しておられ、北京での話が披露されるや、福岡市内に郭沫若先生揮毫の「日中友好碑」を建設しようという話がいきにもちあがりました。

そして、この声は、ただちに知事・市長の自治体訪中団に託され、北京で郭沫若先生は、「福岡をはじめ西日本の人々の平和・友好の願いであれば喜んで書きましよう」と快諾され、昨年11月別紙のような立派な詩文をしたため送って下さいました。

「郭沫若先生詩碑建設趣意書」(郭沫若先生詩碑建設委員会、1975年4月)

※1975年9月29日、「郭沫若先生詩碑建設委員会」(瓦林潔筆頭代表委員、溝口勇夫事務局長)によって金印公園に詩碑が建立された。

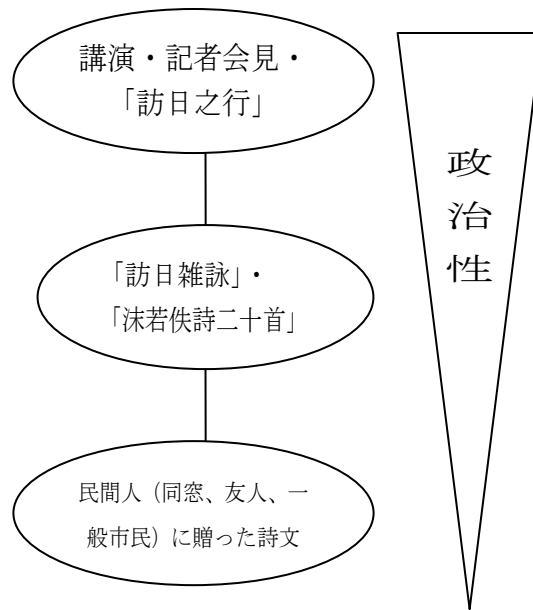
[資料 18] 郭沫若先生顕彰碑(2008年3月8日除幕、附属図書館医学部分館前)

顕彰碑は、同学部の1958(昭和33)年卒同窓会「燦々会」の卒業50年事業として建立。碑の撰文を執筆した日本郭沫若学会会長の岩佐昌暲九州大名誉教授が「郭沫若の業績を記念したものが初めて九大につくられ、大変意義がある」とあいさつし、高さ2メートルの碑が披露された。燦々会会員で在学時に郭沫若の講演を聴いた九州大前学長、杉岡洋一さんは「人間愛・人類愛の大切さを訴えた郭沫若先生がこの碑を通して学生たちに伝われば」と話した。藤田さん(藤田梨那国士館大学教授、郭沫若の孫にあたる一岸田注)は「祖父は九大と福岡市に特別な思いを抱いていたと思う。その場所に立派な碑が建ってうれしい」と語った。

『西日本新聞』(2008年3月9日朝刊)

5. まとめ

[資料 19] 訪日中の郭沫若の言動と政治性（アメリカ批判、日本政治批判）との関係



※「沫若佚詩二十首」…『文匯報』1979年6月13日所収

[資料 20] 郭沫若研究の方向性

- ・ 中国郭沫若研究会、山東省郭沫若研究会、四川郭沫若研究会
- ・ 日本郭沫若研究会（岩佐昌璋会長、2003年発足）
- ・ International Guo Moruo Academy（2008年発足）
- ・ 「郭沫若九大留学90周年記念 郭沫若研究国際学術集会」（2008年9月1日～2日、九州大学医学部、日本郭沫若研究会主催）
- ・ First World Congress of the International Guo Moruo Academy（Johns Hopkins University, U.S.A、2009年8月予定）
- ・ 第1回 郭沫若先生 シンポジウム（2001年2月4日、佐賀県富士町南部地区コミュニティーセンター、郭沫若シンポジウム実行委員会主催）
- ・ 第2回 郭沫若先生 シンポジウム（2004年8月21日、佐賀市ほほえみ館、佐賀地区日中友好協会主催）
- ・ 第3回 郭沫若先生 フォーラム（2007年9月30日、佐賀県東与野町文化ホール、佐賀地区日中友好協会・東与野町文化ホール主催）
- ・ 北京郭沫若記念館（郭沫若故居、北京市西城区）
- ・ 樂山郭沫若故居（四川省樂山市）
- ・ 沫若文庫（アジア・アフリカ図書館、東京・三鷹市）
- ・ 郭沫若記念館（千葉・市川市）
- ・ 郭沫若記念文庫（千葉大学附属図書館）